

中根康浩岡崎市長に聞く

就任から半年余



なかね・やすひろ 1962(昭和37)年8月17日生まれ。岡崎市出身。常盤中、県立岡崎高、早稲田大商学部卒。衆院議員秘書を経て、88年10月の市議選では26歳で初当選。2003(平成15)年11月の衆院選で初当選(比例復活)。17年10月まで通算4期10年務めた。民主党愛知県連代表や経済産業大臣政務官などを歴任。20年10月の市長選で初当選し、第12代市長に就任した。58歳。滝町在住。

岡崎市に拠点を置く東海愛知新聞社。一九四五(昭和二十)年の創刊時より、岡崎市の行政を見続け、報道してきた。七十五周年を迎えた今回は、昨年十月の市長選で当時の現職を大差で破って初当選し、就任から半年余が経過した中根康浩市長(五)に話を聞いた。

(聞き手・竹内雅紀編集局長)

市長就任から半年以上が経過した。現在の心境と率直な感想は。

いろいろなことがあったが、市長の仕事は、ある意味イメージ通りというのが、率直な感想だ。国会議員時代は主に法律づくりに関わり、厚生労働部門(福祉)や経済産業部門(中小企業)が中心だった。法律づくりは方向性を示すもので、実行は自治体に任ざれているという建て付けのものが多い。法律づくりだけでは、自分が標榜する「誰一人取り残さない」を実感・実現できないという思いがあり、自治体での仕事が必要不可欠と感じており、市長選に出馬した。

意見や異論を自身の栄養に

市民の意見が多様なことは当然。意見や異論を十分に受け止め、自分自身の栄養にしなければいけない。これまで「いいこと」を思っていたことはなく、醍醐味は、寄せられた意見に対して何らかの形で応えることができた時に得る満足感だ。毎日が結構楽しく、やりがいがある。

半年間の自己評価は。

まだまだ全然(評価に値しない)。四年間で百点満点に近づけばいい。やりたくてもできていないことや、市民と約束して実現できていないことは山ほどある。既に八分の一が経過。できることを一つ一つ確実に積み上げていきたい。

やりたくてもできていないこと、約束して実現できていないことが多い。

年度替わりに公約の進捗よく状況を確認したが、スケジュール感に大きな差はない。五万円還元については、あの時期(市長選直後の年内)だったから必要だった。新型コロナウィルス感染拡大によって誰がダメージを受けているかがはっきりしない状況で、スピード感を持って

全市民をコロナから救う。特別定額給付金(一律十万円)の効果が見られ、次の給付金が求められていた時期であり、年末年始という経済的に負荷がかかる時期がゆえに必要だった。

「断念」ではなく「切り替え」

年内に実行できないとなった段階で、考え方を切り替えた。年が明けて状況が変わり、必要なコロナ対策は何かと考えた際に、ゼロから積み上げることに切り替えた。「断念」ではなく「切り替え」だ。

五万円給付に「だらしない」コロナ対策という点か。

そういうことだ。あの時(市長選のころ)はとにかくみんなを救う。スクリーニング(対象者絞り)の暇はない。特別定額給付金第二弾を国がやらないなら、岡崎がやるという思いだった。時間的に

岡崎の課題は。

課題はたくさん。市の中心部は今のペースで整備を進めていけばいい。ただし、名鉄東岡崎駅、特に岡ビル百貨店はこれから力を入れていかなければならない。主要回遊動線「QRUWA」と岡ビル。もちろん、太陽の城跡地の活用も仕方も含むが、全一連の流れの中でやっていけばいい。ある意味、市民の合意が形成されている地域。

矢作含めた多極分散型で

そうすると、東西南北だ。東部は既に着手している本宿のまちづくり、南部で市として手伝つべきは中島地区の大型商業施設の誘致。市街化区域の編入といった行政的な手続きが必要となる。北部は工業団地と東名高速道路スマートインターチェンジ、岩津の複合施設を確実にやっていく。具体的な目標が立っていない矢作地区は置き去り感がある。人口、産業面でも力強く支えている地域。矢作に

できなかった一方で、年内実施という「縛り」がなくなり、必要なことをしっかり見極めながらやる。市議会十一月臨時会でも「コロナで困っていない人もいる。だから全市民への五万円給付はおかしい」という意見があった。確かにその通りで、年明けからはそれを見極めながらやる段階に移った。

任期中の五万円給付はないと考えたのか。

(五万円給付を)任期中にやるのではなく、そこに寄せられた市民の期待にこたえられるようなコロナ対策を一つ一つ積み上げたい。五万円給付に代わる、より良いコロナ対策を進めていくべきだ。

市民が納得するコロナ対策は。

まずは的を外さないこと。コロナの影響で本当に困っている人を絞り、限られた財源の中でスピード感を持って行うことだ。例えば、観光、飲食、バス、タクシーなど、かなりはつきりしてきた。集中的に必要な支援を手厚く行うことが必ず

生活困窮者を取り残さず置き去りにしない福祉行政は、さらに充実させたい。また、ヘルスツーリズム(旅行の楽しみの中で健康回復や健康増進を図る活動)やスポーツツーリズム(スポーツに関するさまざまな旅行)を推進させたい。歴史文化遺産を巡る、健康づくりのために歩くといった、楽しみながら健康寿命を延ばす仕掛けづくりをやりたい。岡崎に行くこと、スポーツを奨励する、健康になれる、八丁味噌をはじめとする健康的なものも食べられるといった仕掛けづくりだ。(開催地が愛知県の)二〇二六年のアジア大会が控えている。スポーツを核としたまちづくりもやっていきたい。

コロナ収束後の市政運営は。

観光地としての力は乏しい。(二年後の大河ドラマ『どくろく』を通じた分かったことは、家康は全国ブランドになっていること。生誕地だからといって「家康競争」のトップランナーであるわけではない。日光や久能山、浜松、東京、豊田市松平地区…。全国で家康争奪戦が行われている。家康という資源は分散されてしまいかねない。

観光施策は控えめか。

観光地としての力は乏しい。(二年後の大河ドラマ『どくろく』を通じた分かったことは、家康は全国ブランドになっていること。生誕地だからといって「家康競争」のトップランナーであるわけではない。日光や久能山、浜松、東京、豊田市松平地区…。全国で家康争奪戦が行われている。家康という資源は分散されてしまいかねない。

ツーリズムの推進を

それよりもスポーツや健康、歴史・文

要。ただし、自治体単位でやれることは限界がある。こうした点は国がやるべき。市民から求められているのは何かを考えた時に思いついたのは「寄り添う姿勢」を実感してもらうこと。自治体の財政力では大きなことはできないが、身の丈に合った支援はできる限り行う。生理用品の無償配布や大学生への食料支援、自宅療養者に対するサポート体制整備などは大事だ。中核市として、保健医療体制を最低限守っていくことが責務。国の給付金はないが、的外れや無駄が生じることもある。自治体に資金を預けてもらい、地域事情に合った使い道を許してもらおうの一番ありがたい。

岡崎の強みは。

教育力の高さ。学力だけではなく、人づくりに対して熱心であり、理解があるまちだ。また、多様性があり、バランスの取れたまちであるところが、住み良さだったり、暮らし満足度の高さだったりにつながっている。さまざまな暮らし方や価値観が生かせる、いろいろなチャンスがあるまちである部分が強みだ。

東海愛知新聞に期待することは。

身近な話題が記事になることは市民の励みになる。日常的な頑張りや活動、成績が新聞記事になることは私も含めて大きな喜び。欲を言えば、ページ数をもっと増やしてほしい。市政においても、市長の動きを中心に上げてくれるのはありがたいが、部長らへの取材を通して各部署の動きも時折載せてもらえると励みになる。

市民へのメッセージを。

とにかく今はコロナから市民生活を守ることに全力を尽くす思いで毎日仕事をしています。一日も早くコロナ収束後の新しい岡崎づくりに着手したいが、まずはコロナ対策。気づかないことがたくさんあるので、いろいろな声を市役所に寄せしてほしい。

市民参加型の行政運営

ポストコロナとしては、二〇二一年度からの市政の一番のテーマが「参加型行政」。構想を練る前の段階で市民の声を聞き、それを反映した計画をつくり、ワークショップやシンポジウムをやる。一事業を進める中で何段階にもわたり市民の意見を聞くことが必要だ。これをパブリックインボルブメントと呼ぶが、この手法を確立させ、ふさわしい事業はどのようものかを見極めながら必要な事業を当てはめ、実効性ある市民参加型行政を進めたい。今年度、主にやっていくのは太陽の城跡地と南公園の整備。「市民参加型で好循環」が私のテーマなので頑張りたい。